



音楽家の街
ウィーン

音楽マーケットとしてのウィーン

音楽があるのとないのとでは、やはり生活の潤いが違ってくる。たとえそれがカラオケでも構わない。音に浸るのは気持ちの良いものだ。現代社会では音楽も完全に産業化されてしまい、ビジネスとして成り立たない種類の音楽は、切り捨てられる傾向にある。クラシック音楽界も例外ではなく、現実はなかなか厳しい。

パリ、ロンドン、ニューヨーク、そして東京などは演奏家にとって重要なマーケット。ウィーンもちろん忘れてはならない。これらの大都市でデビューしていないようでは「世界的演奏家」の名もすたる。

現代の音楽マーケットは資本主義社会のルールに支配されてしまい、「金になるか」「投資するだけの価値はあるか」が、判断のポイントになる。「儲かるアーティストを育てよう」とは思っても「芸術を育てよう」と考えるプロモーターは、果たして存在するだろうか。

もともとクラシック音楽の場合、その芸術はすでに完成された過去のもの。演奏技術と解釈の違いはあっても、音楽そのものはこれ以上育てようがないのかも知れない。

音楽が発展する背景には、いろいろな要素がからみあっている。芸術に対して興味を持っている人々が多いことがまずそのひとつ。芸術を保護し、奨励してくれるパトロンも必要だし、ライバル同志の競争も大切な要素だ。アーティストといえども甘やかしてしまつては成長しない。

古き良きウィーンにはこれらの要素がすべてそろつていた。ハプスブルク家という強大なパトロンが存在し、宮廷の貴族みずから率先して音楽をたしなんだ。聴衆も多かったばかりか、オーストリア帝国という広大な領地内には、毛色の異なる文化が共存し、それらはお互いに影響しあつてふくよかな芸術文化の土壌ができていた。

モーツァルト当時のウィーン宮廷ではイタリアの影響が非常に大きかった。イタリア生まれの貴族も多く、宮廷内の公用語はイタリア語といつてもさしつかえない程だった。たとえばモーツァルトの宿敵アントニオ・サリエリは1788年から1824年までの長い間ウィーンで宮廷楽長を勤めたにもかかわらず、ドイツ語は覚えすじまいたつたという。



ベートーヴェン



モーツァルト



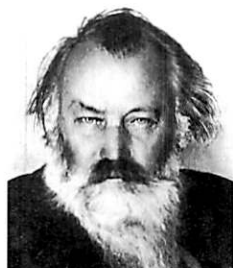
ハイドン



マーラー



リスト



ブラームス

このようなメトロポールには、地元出身ばかりか、いろいろな場所から自薦他薦の音楽家がひきもきらず集まってくる。モーツァルトはザルツブルクから、ベートーヴェンはボンからウィーンにやって来た。

ハイドンはウィーンの南方に位置するアイゼンシュタットのエステルハージ侯爵家に仕えていたので、ウィーンにはあまり縁がなかった。子供の時にはシユテファン大寺院の合唱団で歌ったり、1756年から2年間ウィーンの教会オーケストラでヴァイオリンを弾いたりしていたが、後年有名になってからもウィーンの音楽芸術家協会にはなかなか入れなかった。

ハイドンはオーストリア国内より、イギリスその他をはじめとする諸外国で有名になった作曲家だ。そのためハイドン存命当時から作品の海賊版や、まったくの偽作にハイドンの名前を冠して売る、などという商売が横行し、今日のハイドン研究の大きな弊害になっている。

ブラームスも北ドイツはハンブルクからウィーンに来て、住み着いてしまった音楽家のひとりである。

リストはウィーンで何回も演奏している。シヨパンも旅行でウィーンを訪れたが、パリの方が肌にあっていたようだ。

クラシックからロマン派へ時代の流れに沿って変化してきた音楽は、ブルックナーやマーラーの音楽とともにその爛熟期を迎え、その後はシエーンベルク、ベルク、ヴェーベルンに代表される12音技法の世界へと流れていく。

これらいわゆる「まじめな音楽」とは異なったウィーン独自の音楽も生まれ、もてはやされた。ワルツとオペレッタの世界だ。ヨハン・シュトラウス親子を筆頭に、この音楽の名手は庶民のアイドルだった。

今日でも一旗あげようとしてウィーンを訪れる音楽家は少なくない。しかしこの土地がもつ強い閉鎖性が邪魔になり、なかなかうまく事が運ばない。音楽に対して大きな理解を持ちながらも、よそ者を嫌うウィーンの保守的な気運はいつ頃からのものだろう。新しいアーティストが受け入れられるまでには毎回かなりの時間と忍耐とが必要なようだ。

勉強するには最適なウィーンだが、ソリストはなかなか育ちにくいようだ。